

I.平成 18 年度研究活動報告

本プロジェクトは、はしがきにもあるように、歴史的、文化的な構築物としてのモダニズムのあり方を、国家言説、冷戦の政治言説、ジェンダー・セクシュアリティ言説の相互干渉性の視点から多角的かつダイナミックに再考し、それらの言説の関係性からモダニズムのキャンノン性の構築過程に光をあてることを目的としている。

具体的なアプローチは以下の3点である。

①戦後の政治、批評、教育体制の中でのアメリカのモダニズム文学の制度化、教育制度への取り込み、政治的な文脈の中での輸出・流通を検証し、批評界と政治言説の関係の研究を中心に、モダニズムにどのような意味づけが与えられたか、その歴史的的政治的文脈を再検討する。そのための個々の作業として、文化・教育制度としての新批評と冷戦の国家言説との結びつきを、実際の教育制度との関わりから検討、また同時に国務省がアメリカを表象するものとして各国に設置した図書館のアメリカ文学書やその翻訳プロジェクトの調査、フォークナーと南部文学のキャンノン化過程を、冷戦という文脈から検証する。すなわちモダニズム文学のキャンノン化について、冷戦ナショナリズムの言説空間における公式の国内文化と輸出文化という双方向のベクトルを交錯させ、補助線として K.A.Cuordileone が *Manhood and American Political Culture in the Cold War*(2005)で先鞭をつけた、冷戦のリベラルな言説それ自体の男性性という視点を交えつつ考察することを目指す。この部分については越智が担当する。

②モダニズムが 1920 年代、30 年代に、フィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーらのいわゆるモダニストのキャンノン作家を中心に、どのように形成されたのかを、そこに隠蔽されたナショナリズムとレイシズム、セクシズムに注視しながら再検討する。Walter Benn Michaels, *Our America*(1997)、*The Shape of the Signifier*(2004)等の人種主義、アイデンティティ主義に対する批判的な検討を出発点として、Michael Hardt & Antonio Negri, *Empire*(2000)や Edward Said, *Culture and Imperialism*(1993)等のナショナリズムと帝国主義の関連をめぐる考察を、冷戦期とそれ以降の思想、文学批評における差異と同一性の二項対立の問題に絡めつつ、現代から見たモダニズム「美学」、モダニズム文学のナショナル／インターナショナルな意義を再検討する。この課題については主として三浦が担当する。

③キャンノン化された作家の中でも、とりわけヘミングウェイの男性性の構築と冷戦、およびモダニズム言説のジェンダー性を考える。特に『老人と海』(1952)を中心にした時期に焦点をあて、冷戦の帝国主義の視線とメキシコ湾、カリブ海の地政学という観点から冷戦とマスキュリニティの言説上の親和性を分析する。その際、フロリダからキューバに至るヘミングウェイの足跡に関する一次資料の調査を通じて、ヘミングウェイ、お

よびヘミングウェイをめぐる言説の解釈を上記の視点へと開いていくことを目的とする。この視点については吉川の担当となっている。

I-1 研究経緯

18年度は、当初の予定通りに研究を進めることができた。

越智は、アメリカの「公式輸出」アイテムとしてのモダニズム文学の検討として、占領期にアメリカ文学がどのように日本の民主化教育に入り込んだか、GHQが日本各地に設立した図書館の蔵書リスト、翻訳プログラムの資料から検討した。この調査は主に国会図書館の憲政資料室のマイクロ資料を複写したものを基にする。同時に今回の調査は翌年のアーカイブスでの調査対象の絞り込み作業も兼ねたものであった。一方で、アメリカのモダニズム批評の言説と冷戦の言説をマスキュリティという点から読み込む作業を開始。具体的にはCuordileoneの議論を中心として、その他最新の論文を入手しつつリベラルの論客トリリングや新批評のブルックス、ウォレンの著作、および対共産圏で開かれたCongress for Cultural Freedom関連の二次資料を読み込み、翌年の一次資料収集と論文執筆の準備をした。また、当初の予定どおり、18年末にフィラデルフィアに渡航し、Modern Language Associationに参加し、南部文学、モダニズム文学などのセッションに参加したほか、研究協力者Fred Hobsonとの会合を持ち、理論面についての知見を深めた。また在外研修中の研究協力者三浦、およびWalter Benn Michaelsとも面談して、プロジェクトの進行や方向性について意見交換を行った。

三浦の研究計画としては、ベネディクト・アンダーソン、アントニー・D・スミス、アーネスト・ゲルナー、エリック・ホブズボーム等のナショナリズム論を検討、整理し、その際、冷戦期の具体的なナショナリズム関係資料を入手する。同時にエイミー・カプラン、アン・マックリントックらの文学における帝国主義批判を検討して、ハートとネグリがポストモダニズムの新たな議論枠として提示した、ネーションと帝国の二項対立という図式を、「文学」の成立の基盤的な問題として、理論化することを目指すというものであった。具体的に検討される作家は、スコット・フィッツジェラルドとアーネスト・ヘミングウェイであり、いわゆる「失われた世代」期における「アメリカ文学」の国際的な成立を、帝国主義の隠蔽もしくは批判と、均質な共同体としてのネーションそしてナショナル・アイデンティティの成立の問題として読解する試みを行った。

当初の予定通り、平成18年度8月より、三浦はイリノイ大学シカゴ校に滞在し、ウォルター・ベン・マイケルズを初め、当校に勤務する研究者との対話のかたちで研究をすすめることにした。

吉川は、これまでに収集した冷戦関係の資料から対象を絞り込み渡米、一ヶ月ほど

滞在して、ワシントンD.C.における連邦議会図書館、ナショナル・アーカイヴスにおける資料収集のほか、フロリダ州キー・ウエストのヘミングウェイ・ハウスおよびキューバのハバナにあるヘミングウェイ博物館にて資料収集。ヘミングウェイの政治信条と冷戦期特有の男性性の関わり、あるいは矛盾に着目して資料分析を行うことを予定し、そうした調査をつうじてキューバ革命を支持したと言われる彼が、『老人と海』において、なぜキューバに帝国主義的な視線を向けるのかを明らかにすることを目指すことにしていた。

基本的にはこの予定に沿って、調査をする予定であったが、ハバナの博物館が無期休館になったため、テーマは変えずに調査対象を変更した。冷戦期のマスキュリニティが再構築された過程を検証するために、第二次世界大戦後の Earnest Hemingway の作家活動とマス・メディアの関係を調査し、平成 18 年 8 月 25 日から同 9 月 5 日まで、米国プリンストン大学図書館 Division of Rare Books and Collections にて、Hemingway の伝記の著者であり、元プリンストン大学教授であった Carlos Baker のコレクションと、Hemingway の作品を出版した Scribner 社（Scribner 家は、三代にわたってプリンストン大学の卒業生を出している）のコレクションを調査した。

1930 年代から 1950 年代にかけて Hemingway の活動が取りあげられた雑誌記事や *The Old Man and the Sea* の書評集成、ノーベル賞受賞後の書店のショーウィンドウの写真など、貴重な資料を多数入手することができた。

I-2 研究実績・成果

以上の研究過程を経た途中経過として初年度に発表した成果は以下のとおりである。越智はモダニズム文学を語る新批評の言説が当初必然的に帯びていた男性性を歴史的に検証し、論文「新批評の父たち」にまとめたほか、日本アメリカ文学の全国大会（18年10月）、および東京支部研究発表（19年3月）として、各々「モダニズムの南部的瞬間」、「キャノンの南部化—モダニズムと南部農本主義」として発表した。（I-2-1）また、占領期の文化政策の部分（国会図書館所蔵の資料などを使った成果）については、その成果の一部をお茶の水女子大学COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」のジャーナルに“What Did She Read?”として掲載した。

三浦は Walter Benn Michaels の *The Shape of the Signifier: 1967 to the End of History* の批判的読解に努めた。この成果は、同年 10 月、本書の翻訳『シニフィアンのかたち——一九六七年から歴史の終わりまで』として刊行される。本書の基本的な議論は、マイケルズが既に『われわれのアメリカ』で行っている、現在の多文化主義と呼ばれるものの

原型は 20 世紀初頭のモダニズム期に成立しているという指摘を踏まえながら、モダニズム期とポストモダニズム期をともに、世界は複数の文化から成立しており、それら諸文化は平等で、かつ、かけがえがないという多文化主義的世界観によって成立した、文化がアイデンティティの項になる時代と定め、それに対して、普遍主義を保存する、イデオロギーの優劣によって世界を包括的に認識しようとした冷戦期のパラダイムを対置しようという試みにある。また、上記予定のところで示したような世界観と人種モデルのアイデンティティの関係についてもっとも透徹した思索を行ったひとり、エドワード・サイードの後期の思想を探求するため、Gauri Viswanathan の編纂によるサイードのインタビュー集 *Power, Politics, and Culture: Interviews With Edward W. Said* を読解、整理した。この成果の一部は、平成 20 年 1 月に刊行された翻訳『権力、政治、文化——エドワード・W・サイード発言集成』（上下巻）である。

吉川はヘミングウェイ関連の大部な資料を持ち帰り、その分析にはいった。

II. 平成 19 年度研究活動報告

2年目の研究活動について、以下1において研究の経緯を、2において具体的な内容を報告する。

II-1 研究経緯

越智は予定通り8月上旬にワシントン DC に滞在した。GHQ の図書館の系譜を論じた英語論文を Catherine Turner 編纂の本に寄稿する機会を得たので、この調査のもうひとつの目的でもあった Richard Weaver 関係の資料収集を変更し、おもに国立公文書館と議会図書館で GHQ の図書館に入ったコレクションのヒントになる資料の収集に集中し、アメリカ文学を輸出する際の公式の政治言説の跡づけを試みた。その成果の一部は Turner の本に寄稿したほか、お茶の水女子大学 COE の成果刊行シリーズに収録された。とくに Turner 編の本に寄稿した”Democratic Bookshelf”では、モダニストキヤノンが「輸出用文学」に入り込む転回点を示すような資料を発見し、また日本の場合にはむしろそのひとつ前の段階のニューディール期の多文化的モダニズムのリストが占領期初期にはもたらされていた可能性と、そうしたリストの本が持ち得た意味について考察した。(II-2-1)またこれらの論文を発展させたものを2008年12月にシカゴで開かれる Modern Language Association 年次大会発表予定である。

この年度のもうひとつの目標として保守系雑誌 *National Review* に深くかかわり、かつフォークナー研究と南部文学研究の制度化に大きな役割を果たした Richard Weaver 関連の資料を収集し、リージョナルなもの、ナショナルなもの、インターナショナルなもの、「美学」としてどのように関連させられたのか、またそれが冷戦のマスキュリズムといかなるところで交錯していたかを考察することがあったのだが、上記の事情でこちらについては今後の課題として引き続き検討していきたい。というのも、おそらくこの部分を考察することによって、三浦、吉川の研究と立体的に結びつくからである。ただし、三浦が今年度注目した規範については、Judith Butler がフーコーやエヴァルドを援用しつつ規範概念を論じた”Regulating Gender”を翻訳し、学術雑誌に投稿している。今後のプロジェクトにおいて規範概念もまた冷戦期の文化イデオロギーを考える際のキー概念のひとつになるという点では基礎的な作業ができたことと思う。(II-2-4)

三浦は平成18年度より引き続き、19年度8月まで、イリノイ大学シカゴ校に滞在し、現地の研究者との対話のなかで研究をすすめた。

まず、前年度のフィッツジェラルド、フォークナーに関する議論をヘミングウェイに拡張(II-2-2)ここまでの研究成果をまとめるかたちで、6月22日に、The Summer Institute on Culture and Society by Marxist Literary Group of MLA にて、“On Singularity and

Postmodern Pluralism”を發表(II-2-3)、帰国後、10月13日に、日本フィッツジェラルド協会の年次大会のミニ・シンポジウムで、司会および発表(ここでの発表について、本研究に関連する部分については次の発表と重複する部分が多いので収録しない)、2008年1月28日に、日本アメリカ文学会東京支部にて、「*The Great Gatsby*をいま読む——モダニズム、アイデンティティ、権力」を發表した。(II-2-4)

今年度の研究の特徴は、前年度の研究成果を踏まえながら、アイデンティティとイデオロギーの二項対立の問題を分析するために、Michel Foucault、とりわけ、後期フーコーの規範についての議論を取り入れた点にある。(II-2-4)アイデンティティの多文化主義的世界観が世界の多様性を保持するための装置と言えるのであれば、これに対応する問題系は、イデオロギーのパラダイムにあった冷戦期において、個と全体との関係、個人主義と体制順応主義との対立、そして、全体主義批判として現れた。そして、アイデンティティの問題系と冷戦期の個人対全体の問題を、連続的に理解する枠組を用意したが、後期フーコーの規範、統治性、生政治についての議論である。

三浦が以上のいくつかの考察において総合的に得た知見は1)『偉大なるギャツビー』に代表されるようなモダニズム期のキャンノンは、そもそもアイデンティティへの関与という性質を持っていたが、それらは冷戦期にアメリカのナショナリズムとの関連のなかで古典として定義されていくこと、2) グローバル化する経済とそれへの対抗装置としての「守られるべきものとしてのアイデンティティ」という思考枠は、モダニズム期、ポストモダニズム期もしくは現代において、ほぼ同じ枠組が共有されていること、3) 近年の思想における単独性への注視と帰属の政治学の徹底化は、このようなアイデンティティ主義の更なる強化と認識されえること、4) このような枠組への批判は、フーコーの権力論を中心として、冷戦期における個、知、共同体の定義等を再考察することで、理解されるであることである。この方向にむけて、更に研究を進めると同時に、以上の三浦の成果は、互いに関連したひとつの論考としてまとめられる予定である。

吉川は冷戦期のマスキュリニティが再構築された過程を検証するために、第二次世界大戦後の Earnest Hemingway の作家活動とマス・メディアの関係を調査した。性別役割分業に基づく核家族が冷戦下の国家安全保障の基盤として位置づけられ、男性には家族と国を守る男らしさが要求される一方で、大衆消費社会の中で従来の男性性が揺らいだ当時、Hemingway は猛獣狩り、ゲーム・フィッシング、飲酒、闘牛見物など、「男らしく消費する男」という新たな男らしさのモデルとして提示されたという新しい視座を得た。(II-2-5)

III.研究総括および展望—結びにかえて

以上 I、II で報告したように、この2年間リサーチに出向く機会を与えられ、有意義で

あった。幸いなことにリサーチの結果をまとめて発表するための口頭発表の機会も比較的多く、またタイムリーに文章を発表する機会にも恵まれていた。逆にそのようなことのなかでなかなか腰を据えて長い論文を書くというものにはならなかったことが多少残念と言えなくもない。

越智は2年目で執筆した GHQ の図書館に関する発表を Modern Language Association で発表する予定のほか、三浦もこの5月には日本英文学会の全国大会でフィッツジェラルド、ヘミングウェイについての発表をし、この2年間の成果をまだ今後も発表する予定になっている。冷戦とモダニズムは極めて大きなテーマであるゆえに、今後もこの課題について、具体的なテーマをたてながら着実に歩を進めていければ、と願っている。

今回の研究の過程で、三浦、越智はとくに現在のネオリベラリズムの源泉としての冷戦期のリベラリズムという視点、また個人と国家との関係をつなぐ補助線としての規範概念に注目するようになっていく。この部分については三浦、越智ともに2008年5月にそれぞれ日本英文学会、および Oceanic Popular Culture の学会での研究発表にその発想の一端を示す機会をいただいた。

戦後、日本の英文学研究のなかで、モダニズムは長らく特権的な地位を持っていた。それが冷戦の政策と不可分であるという知見に至るのは冷戦後のことで、本研究課題もその一端を担うものである。しかしだからといって文学それ自体が政治的な思惑を映すだけの鏡では決してない。けれども、作者がその時代や社会のなかで醸成したなにかは、その作品の中に刻まれている。わたしたちはその創造の才を愛でつつ、しかし同時に彼らの言葉が表象する個のありようその他のテーマがはらむ精妙な力関係を読み解き、またそれを現在のわたしたちのありように照射し、考察する。その意味で文学が語ること、語り得ぬこと、語らぬままに語ることはきわめて大きい。そのような文学の作品、それを取り巻く制度を考察しようとする者たちに対話と調査と思考の機会をこうして与えてくれた研究資金にあらためて感謝の意を表して結びとしたい。

以上